



第3章

記載のための
価値証明

第 3 章 記載のための価値証明

3.1.a 総合的所見

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、我が国の 2 世紀以上にわたるキリスト教禁教政策の下で密かに信仰を伝えた人々の歴史を物語る他に例を見ない証拠である。本資産は、日本の最西端に位置する離島を含む地において潜伏キリシタンがどのようにして既存の社会・宗教と関わりつつ信仰を継続していったのか、そして禁教が解かれた後、どのように彼らの宗教的伝統が徐々に変容・終焉し、近代を迎えていったのかを示している。

本資産は、大航海時代にキリスト教が伝わったアジアの中で最も東端にあたる日本列島の中で、その最西端に位置する長崎と天草地方に位置する。資産はその海岸部及び禁教期に潜伏キリシタンが移住した離島に所在する 12 の資産から成る。潜伏キリシタンの文化的伝統が形成される契機となった歴史的出来事が考古学的に明らかにされている原城跡、潜伏キリシタンが様々な方法で信仰を継続したことを示す、密かな信仰対象を有する集落（平戸の聖地と集落、天草の崎津集落、外海の出津集落、外海の大野集落）、潜伏キリシタンが離島に移住し、現地に適応できる環境を選ぶことによって彼らの共同体を維持したことを示す集落（黒島の集落、野崎島の集落跡、頭ヶ島の集落、久賀島の集落）、潜伏キリシタンの伝統が終焉を迎える契機となった出来事が起こり、それゆえ各地の潜

伏キリシタン集落との密接な関係を持った大浦天主堂、そして在来の風土的特徴とカトリックに復帰した信徒が希求した西洋的特徴とが融合した教会堂の意匠に潜伏キリシタンの伝統の変容・終焉が投影されている奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）から成る。

16 世紀後半、長崎と天草地方は海外との交流の窓口であり、この地に宣教師が定住したため、この地域の人々は指導を直接的かつ長期間にわたって受けることができた。その結果、キリシタン大名の保護下にあったこともあり、長崎と天草地方の民衆の間には、他の地域に比べて強固な信仰組織が形成された。17 世紀になると日本では江戸幕府によって禁教政策が採られ、また原城跡を舞台とする「島原・天草一揆」を契機として国家的な海禁政策が確立した。これによって日本国内から全ての宣

教師が不在となり、長崎と天草地方のキリシタンは、表向きは仏教・神道の信徒として振る舞い、地域の神社に参拝しつつ、小規模な信仰組織を維持して密かに自らのための信仰を継続した。2世紀を越える長期の禁教の中で、それぞれの集落では一見すると日本の在来宗教のように見え、しかしキリスト教に根を置く固有の信仰形態が育まれた。

これらの潜伏キリシタン集落では、宣教師に代わる指導者が生まれ、指導者を中心に構造的な組織が形成された。指導者は洗礼・葬儀のほか、教会暦による宗教儀礼を司った。主に宗教儀礼が行われた指導者の家屋内には、キリスト教を起源とする聖画像が密かに祀られ、独特の信心具及び日本語による教義書・教会暦などが伝承された。これらの集落には、外見は仏式としつつも、潜伏キリシタンに独特の埋葬方法を採る墓地が形成された。教会堂の代わりにキリシタンの処刑地を殉教の聖地として密かに崇敬するとともに、神社・寺院・山岳など在来宗教の信仰の場を自らの信仰の場としても共有し、キリシタンとしての祈りを捧げた。

18世紀末になると、人口増加を背景として、これらの潜伏キリシタン集落から島

嶼部への移住が行われた。彼らは苛酷な環境の中で土地を拓き既存の仏教・神道を宗旨とする住民たちとの間で互助又は黙認の関係を築くことにより、密かに固有の信仰形態を継続した。

19世紀後半、潜伏キリシタンは開国によって来日した宣教師と大浦天主堂で密かに接触した（信徒発見）。1873年、キリスト教の禁教が解かれた後、長崎と天草地方の潜伏キリシタン集落では、宣教師の指導下に入ってカトリックに帰依する者が現れた一方、それまで続けてきた信仰形態を変えることを拒む者（かくれキリシタン）、神道・仏教へと転宗する者も存在した。カトリックに帰依した集落では、指導者の屋敷跡など禁教期の記憶が残る場所をはじめ、移住先のわずかな平地又は海からの眺望の良い場所などに、信仰組織の労働奉仕によって新たに教会堂が建造された。

このように、本資産は、禁教政策下において形成された潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる独特の伝統を表す稀有な証拠である。長期にわたる禁教政策の下で育まれたこの独特の伝統は世界的に稀なものであり、従って、その始まり・形成・変容・終焉の在り方を示す本資産は顕著な普遍的価値を持つ。

3.1.b 評価基準への適合性の証明

評価基準(iii)：現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明(の存在)を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

本資産は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を継続する中で育んだ独特の伝統を物語る証拠である。

禁教期の潜伏キリシタンが自らの信仰を密かに継続する中で育んだ固有の信仰形態を物語る証拠

日本の西端に位置し、16世紀からポルトガル船が寄港するようになった長崎は、フランシスコ・ザビエルに続く宣教師が定住して宣教の拠点となり、宣教師の指導を直接的に長く受けることができた場所である。そのため、長崎と天草地方の民衆には他の地域に比べてキリシタンの信仰が深く定着していた。

16世紀末に始まる日本のキリスト教禁教は、17世紀になると徹底的なものとなり、宣教師は国外へと追放され、教会堂は全て破却された。密かに活動する宣教師及び棄教しないキリシタンには拷問などの弾圧が加えられ、多くのキリシタンが殉教又は棄教を余儀なくされた。1637年から翌年にかけてキリシタンが原城跡に立て籠もった「島原・天草一揆」により、密かにキリスト教の信仰を継続する者が根強

く存在することが知られることとなった。この事件を契機として、江戸幕府は宣教師が潜入して入国を謀る可能性のあるポルトガル船の日本への来航を禁じ、海禁体制を確立させた。1644年に日本にいた最後の宣教師が殉教して以降、残されたキリシタンは密かに自らの信仰を継続していくことを余儀なくされた。

長崎と天草地方の潜伏キリシタン集落では、「組」の指導者らが中心となって、禁教以前からの信仰組織を密かに維持した。「帳方」又は「水方」などと呼ぶ指導者が、宣教師に代わって儀式・教理・教会暦などを司り、洗礼の秘跡を授け、死を迎える人に祈りの言葉を唱える「送り」を執り行った。「お水授け」と呼ぶ洗礼は、潔斎した複数の指導者がラテン語の経文を唱えつつ、聖地と見なされた場所などから特別に採取した「聖水」を用いて行われた。死者が出た際には、表向きには所属する仏教寺院の僧侶を呼んで仏式の葬儀を行い、その

後に指導者が仏教の経文を無効とする潜伏キリシタンの祈りを密かに唱えた。墓石の外観は仏教式であったが、顔や胴の向き・姿勢が仏教徒とは異なる独自の方法で埋葬した。

さらに、潜伏キリシタンは、それぞれの集落において一見すると日本の在来宗教における信仰の仕方のように見える方法で、自分たちの信仰を継承する手法を戦略的に採った。平戸では、指導者の家屋に仏壇や神棚と共に「納戸神」と呼ぶ潜伏キリシタンの祭壇を祀った。キリスト教伝来以前から神道・仏教の霊地であった山岳を潜伏キリシタンとしても聖地と見なしたほか、禁教期以前のキリシタンの墓地を聖地として、禁教初期に信徒が処刑された島を、殉教地として密かに崇敬した。天草では、貝の内面の模様をマリアの姿に見立てて祈りに用いたアワビなど漁村に独特の信心具が指導者の家屋に継承され、村の守り神である神社に参拝する際にも密かに潜伏キリシタンの祈りを唱えた。外海では、指導者は日本語による教義書・教会暦及び日本人が描いたマリア像などを伝承した。

18世紀末になると、藩の取りかわしにより人口が増加した外海から離島への移住が政策的に進められ、その結果、潜伏キ

リシタンが島嶼部に分布することとなった。移住した潜伏キリシタンは、移住先の既存宗教である神道・仏教の集落との間で互助又は黙認の関係を築いて、潜伏の隠れ蓑とした。久賀島では、既存の仏教集落との間で生業（農漁業）において互助関係を築き、潜伏の隠れ蓑とした。無人島であった頭ヶ島では、仏教徒であった開拓者の指導により入植が始まり、その後潜伏キリシタンの集落が形成された。野崎島は神道の霊地であったため、移住した潜伏キリシタンは神社の氏子となって神道の信徒を装った。黒島では、移住した潜伏キリシタンは仏教集落に干渉されず、また仏教寺院の中でマリアに見立てた観音像に対して密かに祈りを捧げることができた。

このように、潜伏キリシタンの密かな崇敬地、在来宗教の信徒と信仰の場を共有した神社・寺院、神道・仏教の集落との関係を示す集落の立地又は互助の場、信仰組織の存在を示す墓地、密かに設けた祭壇及び信心具が伝承される指導者の家屋等から成る潜伏キリシタンの集落は、一見すると日本の在来宗教のように見える潜伏キリシタンに固有の信仰形態を表す証拠である。

新たな信仰の局面及び固有の信仰形態の変容・終焉

19世紀後半に日本が開国すると、外国人居留地が形成され、2世紀半ぶりに宣教師が来日した。1863年にパリ外国宣教会の宣教師が潜伏キリシタンの探索を念頭に長崎を訪れ、1597年に殉教し1862年に列聖された「日本二十六聖人」に捧げるために、1864年に長崎居留地の一角に大浦天主堂を建造した。献堂の直後、密かに潜伏キリシタンが大浦天主堂を訪れ、宣教師に信仰を告白するという出来事（信徒発見）が起こった。この出来事はまたたく間に各地の潜伏キリシタン集落へと伝わった。その後、信仰組織の指導者は密かに大浦天主堂を訪れ、自分たちが継続してきた信仰を宣教師へ説明するとともに、改めて教理・秘蹟の指導を受け、それぞれの集落へと伝えた。

この2世紀半ぶりの宣教師との接触は、各地の潜伏キリシタン集落に様々な反応を引き起こした。速やかに宣教師の指導下に入った集落もあったが、中には禁教下にもかかわらず信仰を表明したために役人に捕らえられ厳しい弾圧が加えられた集落もあった。また宣教師と接触しつつもそれまで続けてきた信仰形態を変えることに躊躇する集落も存在した。このような新

たな状況において集落内でも立場が分かれ、集落で伝承してきた信心具の継承を巡って対立が生じることもあった。開国後に行われた明治政府による潜伏キリシタンへの弾圧は、欧米から大きな非難が寄せられ、これを受けて政府は1873年に禁教の高札を撤廃した。

宣教師の指導下に入った集落はカトリックへと帰依し、かつての指導者の屋敷又は新たに簡素な建物を建てて「仮の聖堂」とした。これらの教会堂が建てられた場所の多くは、禁教下の指導者の屋敷跡又は信仰を装った神社の隣地など、禁教期の記憶が残る特別な意味を持つ場所であった。また、丘陵に囲まれた谷地形のわずかな平地、海からの眺望及び船の乗り付けの良い場所など、教会堂の立地に関して自然環境も考慮された。このような集落では、やがて建物の老朽化及び信徒の増加に伴い、より本格的な教会堂が必要となったため、キリシタンは厳しい生活を送りつつも漁業などの生業で得た収入を蓄え、新たな教会堂の建造資金に充てた。教会堂の設計は宣教師又はその指導を受けた日本人が行い、建造に当たっては地元の材料を用い、信徒自らが労働奉仕も行った。このような小規模な教会堂は、「信徒発見」により新局面を迎えた潜伏キリシタン固有の信仰形態が

変容・終焉したことを象徴的に表す存在である。

一方、解禁後も宣教師の指導下に入ること拒んだ集落では、引き続き指導者を中心として禁教期以来の信仰を継続した。彼らは「かくれキリシタン」と呼ばれる。長年の間に潜伏期の伝統は変容し、また「かくれキリシタン」自体も現在では希少な存在となっている。さらに、解禁後に神道・

仏教に転宗した集落もあった。これらの集落は、潜伏キリシタンの固有の信仰形態が終焉したことを表す今ひとつの存在である。

3.1.c 完全性の言明

本資産は、(I)潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統の開始・形成の段階から、(II)その多様な展開の段階、及び(III)移住による信仰組織の維持の段階を経て、(IV)新たな信仰の局面が到来し、伝統が変容・終焉した段階に至るまで、長崎と天草地方における潜伏キリシタンの伝統の歴史を語る上で必要不可欠の 12 の構成資産から成る。それらは、厳正な比較研究に基づき選択されたものである。これらの一群の構成資産は、資産の顕著な普遍的価値を過不足なく表すものであり、かつ価値証明に必要な全ての要素を含んでいる。その範囲は適切に設定され、いずれも保存状態は良好である。

資産全体の価値を表す全ての要素を含んでいること

本資産は、潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統の歴史を語る上で必要不可欠のものとして、比較研究により厳選された 12 の構成資産から成る。

それらは、潜伏キリシタンの伝統形成の契機となった「島原・天草一揆」の舞台である原城跡、信仰の継続の様々な形態を表す 4 つの集落、移住による信仰組織の維持を表す 4 つの集落、新たな信仰の局面が到来する舞台となった大浦天主堂、伝統の変容・終焉を端的に表す奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）である。

集落には、禁教期における潜伏キリシタ

ンの指導者の屋敷跡をはじめ、潜伏キリシタンの墓を含む集落の墓地、巧みな潜伏の戦略を表す場所、密かな信仰対象など禁教期における固有の信仰形態を表す物証、及び禁教期の固有の信仰形態を象徴的に表す記憶の場、移住先の独特の立地の下に建造された教会堂を含む。いずれの場合にも、禁教期以来の土地利用が残された集落の範囲を含めており、潜伏キリシタンの信仰に関わる独特の伝統を十分に示している。

「島原・天草一揆」の舞台である原城跡は、城郭の規模、城郭としての特質を表す曲輪群、一揆の際の防御施設など、16世紀から17世紀にかけての遺構・遺物が現在も残され、一部は地中に埋蔵されている。これらは、学術的な調査により価値が明らかとなったものである。

潜伏キリシタンが2世紀半に及んで継続した信仰を宣教師に告白した舞台である大浦天主堂は、教会堂のみならず相互に関連性を持つ境内の建造物及び境内の遺構・遺物の全てが構成資産の範囲に含まれている。

さらに、奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）は、潜伏キリシタンの信仰に関する伝統の変容・終焉の在り方を最も端的に表しており、特に江上天主堂は、立

地・意匠・構造の観点から在来技術に見る風土的特徴、及びカトリックに復帰した信徒たちが希求した西洋的特徴の双方を良好に残している。

各集落、城跡、大浦天主堂及び奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）は、全体として顕著な普遍的価値の証明に寄与している。

無傷であり、その脅威が見られないこと

構成資産のほとんどは、離島又は都市周辺の農村などに存在し、現時点では開発による直接の影響は見られない。いずれの構成資産においても適切な保存管理が行われており、管理放棄による負の影響は受けていない。各構成資産は周辺環境とともに良好に保全されている。

いずれの構成資産には、個々の構成資産からの視認周囲を基本とする適切な範囲の緩衝地帯が設定されている。特に島嶼部の構成資産については、開発が見込まれる海域を含む適切な範囲の緩衝地帯に囲まれている。大浦天主堂の周辺は、観光地化が進んでいるものの、景観法及び都市計画法を中心とする法的規制によって望ましい周辺環境が維持されている。いずれの構成資産の緩衝地帯におい

ても、保全環境に負の影響を与える可能性のある行為に対して適切な法的規制を行うとともに、「包括的保存管理計画」（附属資料 6a）の下に保全又は改善のための対策を明示している。

表 3-001

何がきっかけで（伝統が）始まったのか [海禁体制確立、固有の信仰形態萌芽]		「島原・天草一揆」の舞台	原城跡
限られた状況の中で既存の社会や宗教と共生しながら信仰を伝えた伝統 [どのようにして信仰を伝えたか]	信仰維持の多様な形態 [どのようにして潜伏していたのか]	既存の自然崇拝に重ねて山岳や島を崇拝した集落	平戸の聖地と集落
		生活・生業に根差した身近なものを信心具として代用し崇敬した集落	天草の崎津集落
		聖画像を密かに拝むことで信仰を秘匿し、教会暦や教理書をよすがに信仰を伝承した集落	外海の出津集落
		既存集落では一般的に見られる神社に、密かに自分たちの信仰対象を重ねることによって信仰を秘匿した集落	外海の大野集落
	移住によるコミュニティ維持の多様な形態 [どのような土地に移住したのか]	藩の牧場跡の再開発地として空白地となっていた場へ移住することによって信仰を継承した集落	黒島の集落
		神道の聖地として未開拓であった地へ移住することによって信仰を継承した集落	野崎島の集落跡
		病人の療養地として忌避の場であった島へ移住することによって信仰を継承した集落	頭ヶ島の集落
		藩の開拓移民政策に従い、集落が形成されていなかった未開地に移住して信仰を継承した集落	久賀島の集落
何がきっかけで（伝統が）終わったのか [新たな信仰の局面の到来]		「信徒発見」の舞台	大浦天主堂
何が（伝統の終焉を）可視的に示しているか [どのように伝統を変容させ、終わらせたのか]		移住先の地勢に適応した教会堂の建造によって、伝統の終焉を迎えるプロセスを示す代表的集落	奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）

3.1.d 真実性の言明

本資産の構成資産は、いずれも高い水準の真実性を維持している。「世界遺産条約履行のための作業指針」第82項に示されている文化遺産に適用すべき8つの属性のうち、本資産において適用すべき属性は、以下の5つ又は6つである。

精神・感性

最も重視すべき「精神・感性」の属性については、その属性の性質上、一見しただけではその歴史的背景を読みとりにくい構成資産がいくつかあるものの、それぞれの場所が持つ信仰上・歴史上の背景を確実に伝えている。

用途・機能

現在はほぼ無人島となった野崎島の集落跡がその機能を失っていることを除けば、いずれの構成資産においても当初の機能が保持されており、高い真実性を保持している。原城跡は「島原・天草一揆」で破壊されたこと自身が顕著な普遍的価値に貢献しており、機能を失っていることに意義がある。現在、原城跡は当時の状況を伝える史跡として保存・活用されている。

位置・環境

それぞれの構成資産が置かれた「位置・環境」も往時の様相を良好に伝えており、総体としての場所の重要性とともに、高い真実性を保持している。

形状・意匠及び材料・材質

構成資産の大部分が当初の材料をそのまま残しており、「形状・意匠」及び「材料・材質」の属性に関する高い真実性を保持している。経年変化によるやむを得ない取替部分については、慎重な検討を経て最低限度に留め、詳細な記録を作成することとしている。各集落では、これまでの生活・生業の営みの中で更新されてきた住居もあるが、歴史的な土地利用形態が継続され、集落又は周辺の景観全体を表す地形・地割、その他要素の同一性は保持されており、真実性には影響を与えていない。さらに、このような高い真実性を有する状態を将来にわたって維持し続けるために必要な法制度及び技術的・専門的支援体制も確立されている。

伝統・技能・管理体制

構成資産を良好に維持・継承するため必要な修理等が行われてきたが、いず

れも伝統的な技法を用いて実施されており、伝統・技能の真実性は担保されている。また、全ての構成資産は保存管理計画において修理修繕のガイドライン等を定めており、管理体制に係る真実性も担保されている。

各構成資産の真実性について、本資産の顕著な普遍的価値に関連する属性に基づき、以下に記述する。

原城跡の真実性

原城跡（構成資産 001）は遺跡であるため「用途・機能」の属性については失われているが、以下の5つの属性に基づく真実性を保持している。

形状・意匠

原城跡は、当時の地形及び石垣等の配置を損なうことなく保持している。長年にわたる発掘調査等により、17世紀初頭の意匠をそのまま残していることが明らかとなっている。今後の復旧及び整備にあたっては、考古学的な発掘調査の成果に基づき、形状・意匠を損なうことなく適切に実施することとしている。したがって、形状・意匠に関する真実性の保持に問題はない。

材料・材質

原城跡の構成資産の範囲内に存在する遺構・遺物の材料・材質は、地下に埋蔵されているものも含め、安定した状態で保存されている。また、学術的調査に基づき遺構を復旧した場合にも、最小限の改変に留めるように配慮している。石垣の一部は後年に改修されているが、当初の石材が利用されており、材料・材質の真実性に問題はない。

伝統・技能・管理体制

17世紀初頭から存続する石垣については、今日に至るまで旧来どおりの伝統的な技法を用いて修理を実施しており、伝統・技能に関する真実性は保持されている。

位置・環境

現状は17世紀初頭の建物配置及び周辺環境との位置関係を良好に保持していることが、発掘調査等によって明らかとなっており、位置・環境に関する真実性は保持されている。

精神性・感性

2世紀を越える海禁体制及び禁教体制確立の契機となった歴史的な場所として、現在も「島原・天草一揆」で亡く

なった人々を追悼するミサが城内で行われており、城跡が持つ精神性・感性に関する真実性は保持されている。

集落の真実性

平戸の聖地と集落（構成資産 002・003）、天草の崎津集落（構成資産 004）、外海の出津集落（構成資産 005）、外海の大野集落（構成資産 006）、黒島の集落（構成資産 007）、野崎島の集落跡（構成資産 008）、頭ヶ島の集落（構成資産 009）、久賀島の集落（構成資産 010）から成る「集落」については、以下の5つの属性に基づく真実性を保持している。

形状・意匠

文献資料などとの比較調査から、自然環境、道、家屋などで構成される基本的な集落構造を当初から維持していることが明らかとなっている。

用途・機能

集落を構成する棚田、家屋、信仰の場などの用途・機能は、文献資料と現在の土地利用との比較によって、現在もなお同一性が保たれていることが明らかとなっている。野崎島の集落跡については、集団移転により無人島となっている

ためその機能が失われているが、土地利用の在り方及びその景観は歴史的・伝統的価値を持つ文化的景観として良好に保存されている。

伝統・技能・管理体制

必要な修理が継続的に行われているが、いずれも各集落の歴史的背景や生業を踏まえた伝統的な技法が用いられている。

また、集落の歴史的・伝統的価値が損なわれることがないように、あらかじめ保存管理計画に修理修繕の際のガイドラインを定め、これに基づいた行為の誘導を図るため、今後の管理体制にも問題はない。

位置・環境

文献資料及び土地利用の分析などから、集落を構成する農地、宅地、道などの配置、自然環境を構成する地形や川などの同一性が保持されていることが明らかとなっている。

精神性・感性

それぞれの集落には、禁教期の潜伏キリシタンの伝統を表す信仰の場や土地利用などが残され、現在も維持されてい

る。現在でも神道・仏教・キリスト教の共存が多く集落で見られ、禁教期の精神的な有り様を伝えている。解禁後に集落に建てられた教会堂の多くは、禁教期以来の記憶の場に立ち、又は禁教期の厳しい環境での生活を想起させるような特徴的な場所に立ち、歴史的背景を現在に伝えている。

奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）の真実性

奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）（構成資産 011）については、以下の6つの属性に基づく真実性を保持している。

形状・意匠

江上天主堂については、調査研究によって建造当初の状況が明らかになっており、当時の形状及び意匠を保持していることが確認されている。天主堂の周辺環境についても、文献調査などとの比較研究から、禁教期の潜伏キリシタンが移住した当時の地勢を保持していることが明らかになっている。

材料・材質

江上天主堂については、これまで維持のために必要な修理が行われてきたが、

その際に後補材の撤去又は欠損した部材の復旧が適切に行われている。

用途・機能

江上集落を構成する農地・家屋・信仰の場、地勢などの自然環境は、文献史料と現在の土地利用との比較によって、現在も同一性が保たれていることが明らかとなっている。江上天主堂は現在も地元の信徒に利用されている。

伝統・技能・管理体制

江上天主堂の維持のため必要な修理が継続的に行われているが、旧来どおりの伝統的な技法が用いられている。また、継続的な修理を通して伝統及び技能を受け継ぐ技術者が育成されており、今後の管理体制に問題はない。

また、禁教期の地勢が損なわれることがないように、あらかじめ集落内で行われる改変行為についてガイドラインを定めており、今後の管理体制に問題はない。

位置・セッティング

江上天主堂については、創建以来の位置を変えずに存続している。江上集落の地勢についても、文献史料及び土地利用の分析などから、禁教期からの同一性が

保持されていることが明らかとなっている。

精神・感性

江上天主堂は、潜伏キリシタンの伝統が終焉を迎えたことを象徴しており、現在もカトリックの教会堂として利用されている。江上集落は、潜伏キリシタンの移住先における地勢の典型例として、歴史的背景を現在に伝えている。

大浦天主堂の真実性

大浦天主堂（構成資産 012）については、以下の6つの属性に基づく真実性を保持している。

形状・意匠

調査研究によって建造当初の状況が明らかになっており、当時の形状及び意匠を保持していることが確認されている。一部増改築が行われているが、その改変の過程は修理の際に実施した学術調査により明らかにされている。

材料・材質

これまで天主堂の維持のため必要な修理が行われてきたが、その際に後補材の撤去や欠損した部材の復旧が適切

に行われている。

用途・機能

今日も「信徒発見」の記念ミサ及びクリスマスなど宗教儀礼を行う場として用いられており、建造当初の機能を保持している。

伝統・技能・管理体制

天主堂の維持のため必要な修理が継続的に行われているが、旧来どおりの伝統的な技法が用いられている。また、継続的な修理を通して伝統及び技能を受け継ぐ技術者が育成されており、今後の管理体制にも問題はない。

位置・環境

創建以来の位置を変えずに存続している。また、周辺と一体となった良好な環境が保存されている。

精神・感性

キリスト教の宗教儀礼を執り行う空間として、又は地域の人々が伝えた信仰の力を表すシンボルとして重要な存在となっている。また、日本のカトリック信者の精神的な拠り所であり、構成資産の持つ宗教的・歴史的背景を今もなお伝えている。

3.1.e 保護と管理に必要な措置

構成資産は、全て文化財保護法等により良好に保護されている。また、緩衝地帯においては、文化財保護法・景観法・自然公園法をはじめとする諸法令により、適切な保全措置が講じられている。構成資産の保存管理の具体的方法及び整備活用の方針を示した個別の計画（保存管理計画）が策定され、これをもとに構成資産の所有者又は管理者が適切に施策を実施することとしている。また、関係地方公共団体は、資産全体が有する顕著な普遍的価値を一体的に保護する観点から「包括的保存管理計画」（附属資料 6a）を策定し、その実行体制として、所有者等とともに「世界遺産保存活用協議会」を設置した。この協議会は、資産の適切な保存・活用について情報を共有し、協議を通じて統一的な合意形成を行うことを目的とする。また、この協議会は、文化遺産の保護に係る主務官庁である文化庁のほか、イコモス会員を含む「長崎世界遺産学術委員会」の専門家による指導・助言を受ける。

1. 資産の保護

構成資産の保護は、文化財保護法に基づき適切かつ厳格に実施することを基本方針とする。現在、個々の構成資産は良好な状態で保全されているが、将来にわたって、顕著な普遍的価値が損なわれることがないよう定期的かつ体系的なモニタリングを行う。また、史跡の整備又は建造物の修理を行う場合には、学術的な裏付け調査の成果に基づくこととしている。構成資産ごとに策定した保存管理計画では、世界遺産としての顕著な普遍的価値を保護するための基本方針をはじめ、構成資産の現状を踏まえた管理及び整備活用の方法が示され、所有者等はこれに基づき構成資産の適切な保存管理を実施する。自然災害等に備えて危機管理体制が確保されており、異常事態が発生した場合には関係者間で速やかに情報共有し、適切に対応することとしている。

2. 緩衝地帯における保全

世界遺産としての保存環境を確実にするために、各構成資産の周囲に緩衝地帯を設定した。設定に当たっては、構成資産からの視覚的一体性及び構成資産の価値と関連する歴史的背景を考慮した。緩衝地帯においては、文化財保護法・景観法・都市計画法等により、資産周辺の良い自然環境・景観が保全されている。これらの法令を根拠として、構成資産の保護に負の影響を及ぼしかねない開発等の脅威を抑制するとともに、構成資産と一体となった良い景観形成を図ることとしている。

想される来訪者に対しては、行政・所有者・NPO法人・地域住民等が連携して、適切な受入体制を構築しつつ、適正な来訪者数を視野に入れた来訪者管理を実施する。また、地域振興を促進する諸施策と連携して定住人口の増加を促し、構成資産の保存管理に寄与することを目指す。

3. 長期的な課題への戦略

わが国全体として、農山漁村における人口減少及び高齢化は喫緊の課題であるが、構成資産の所在する地域では特にこのような現象が顕著に生じており、構成資産の維持及び地域の存続への影響が懸念される。そのため、今後それぞれの地域の経済及び社会を活性化させ、地域社会の基盤を強める諸施策を実施していくこととしている。世界遺産登録を契機として増加が予

3.2 比較研究

本節では、推薦資産と成立背景や性質が類似する国内外の文化遺産との比較を行い、推薦資産がそれらのいずれとも異なる独自の価値を持ち、適切な資産構成であることを示すとともに、世界遺産一覧表に記載することの合理性を導き出すこととする。

比較研究に際しては、推薦資産の価値証明及び世界遺産一覧表における本資産の位置付けを補強するために、以下の 5 点に基づき分析を行った。

- A. 同種の世界遺産（特に宗教弾圧と直接関連するもの）との比較
- B. アジア諸国のキリスト教受容の歴史に関する比較
- C. 17 世紀後半から 19 世紀前半の日本国内の潜伏キリシタン関連遺産との比較
- D. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン集落との比較
- E. 信仰の伝統の移行期において、長崎と天草地方の潜伏キリシタンの各集落に建造されたカトリック教会堂に関する比較

A. 同種の世界遺産（特に宗教弾圧と直接関連するもの）との比較

本資産は、日本におけるキリスト教への弾圧下の密かな継続をテーマにしているが、異なる宗教が接触することにより顕著な軋轢が生じたり、政治的又は思想的な観点から弾圧が発生したりした事例は世界の歴史の中で多く見られる。そのため、世界遺産一覧表に記載されている計 1052 件（2016 年 10 月時点）の資産の中から、宗教への弾圧を直接のテーマとする資産の事例又は間接的に関わりのある資産の事例など、表 3-002 に示す 10 件を抽出し比較研究を行う。

A-1. 世界各地に所在する宗教弾圧と直接関連する世界遺産との比較研究

ローマの歴史地区（イタリア及びバチカン市国）

バチカン市国（バチカン市国）

これら 2 つの資産は、ローマ・カトリック成立の最初期からのキリスト教の歴史を背景としている。その中には、1 世紀のパウロやペテロの殉教をはじめ、4 世紀にローマ帝国でキリスト教が公認・国教化さ

れるまでに断続的に行われたキリスト教徒への迫害も含まれている。ネロ、ドミティアヌス、デキウス、ディオクレティアヌスといった皇帝の治世下で迫害が行われたとされ、その期間は長崎と天草地方と同様に長期間にわたっている。しかし、ディオクレティアヌス帝による迫害でさえ大規模であったかは疑問とされる。また、迫害の目的がキリスト教の根絶であることは稀であったため、ローマ帝国内で使徒又は宣教師による布教が途絶えることなく行われ、313年にミラノ勅令により公認されるまでに勢力が拡大した。

一方、日本の禁教の場合には、江戸幕府が明確にキリスト教の排斥を目指して海外との交流を制限したため、国内において宣教師は不在となり、個々のキリシタンの信仰組織間のつながりも次第に減少し、長崎と天草地方に独特の潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が形成されるに至った。そのため、アジアの最東端に位置する日本の長崎と天草地方におけるキリシタンの信仰の継続に関する伝統を表す資産と、ローマなどキリスト教の中心地となった他の地域におけるキリスト教の関連資産との間には、歴史的な背景・展開の明らかな違いがある。

ペーチの初期キリスト教墓所(ハンガリー)

ペーチの考古遺跡は、4世紀にローマ帝国でキリスト教が公認された頃から造営された初期キリスト教の性質が見られる墓所であり、カタコンベに描かれた聖書をモチーフとする壁画は芸術的価値が高いと評価されている。4世紀末に始まる異民族の流入や西ローマ帝国の崩壊などの激動の時代にあっても、8世紀末のカール大帝によるアヴァール討伐までキリスト教の信仰が連綿と継続した歴史を物語っている。

数世紀にわたる困難な状況下において信仰が継続したという点では長崎と天草地方の事例と共通するとも考えられるが、ハンガリーの場合は商業を通じた人の往来があったため、信徒や聖職者の間の接触も途絶えなかったと考えられる。また、当地を支配した異民族もキリスト教の根絶を意図したわけではなかったため、長崎と天草地方とは背景が異なる。

カディーシャ渓谷と神の杉の森(レバノン)

カディーシャ渓谷は切り立った崖や洞窟から成る天然の要害であり、キリスト教史の初期から人里離れた場所を求める人々が隠棲していた。7世紀にマロン派の

人々は、シリアでのビザンツ帝国との対立やアラブ人の侵入から逃れて当地に移り住んだ。彼らはその後のイスラム諸王朝からの圧迫にもかかわらず、現在まで独自の信仰を継続してきた。

困難な状況の中で信仰を守ったという点では長崎と天草地方の事例と共通するとの見方もできるが、マロン派の場合は聖職者が集住したためこの溪谷を中心として発展し、15世紀に当地に総大司教座が置かれるなど重要な地位を占めた。一方、幕府の外交政策によりバチカンとの直接的な接触が絶たれた長崎と天草地方の場合は、一般の信徒たちが宣教師不在のなか独自の文化的伝統を形成しており、カディーシャ溪谷の事例とは本質的に異なる。加えて、マロン派がイスラム勢力からの攻撃を避けるために溪谷内の洞窟に居住したのに対し、長崎と天草地方の場合は禁教下でも他宗教とその信仰組織との折り合いをつけつつ共存しており、この点でも歴史的背景が異なる。

ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩石群 (トルコ)

カッパドキアは、アナトリア台地に位置し、侵食を受けた特徴的な地形を持つ。4世紀にキリスト教徒がこの地の洞窟に移り

住み、岩を穿って住居を形成した。その後、アラブ人の攻撃を受けるようになると、洞窟同士を連結した町を形成して隠れ住んだ。

カッパドキアの場合も困難な状況の中で信仰を継続した事例ではあるが、信仰組織の中に聖職者がおり、地理的に近いコンスタンチノーブルなどとの接触が保たれたと考えられ、一般の信徒たちが神父不在のなかで独自に信仰を継続した長崎と天草地方の事例とは異なる。また、カッパドキアの場合は他宗教のコミュニティからの攻撃を物理的に防ぐために洞窟に隠れ住んだが、長崎と天草地方の場合は禁教下でも他宗教の信仰組織との折り合いを付けつつ共存しており、この点でも歴史的背景が異なる。

ヴァルトブルク城 (ドイツ)

マルティン・ルターが新約聖書のドイツ語への翻訳を行った場所として有名な城である。当時ルターは教皇に破門されたのみならず、神聖ローマ皇帝からも異端視され、カトリック勢力の迫害を逃れるために、この城に匿われていた。16世紀末には生前のルターを慕って多くの人が巡礼に訪れるようになるなど、宗教的・文化的に重要な城である。カトリック勢力との対立

の中でルター派が生まれたという重要な出来事を示す場所ではあるが、城そのものは18世紀末までにほとんど廃墟と化した。

長崎と天草地方の事例も16世紀以来のキリスト教をテーマとし、宗教的迫害を背景としているが、著名な人物の功績ではなく民衆による信仰の継続に特質がある点で異なる。

ヤヴォルとシフィドニツァの平和教会（ポーランド）

シュレジエン地方に建つルター派の教会堂である。ウェストファリア条約で認められた原則に基づき、当地を治めていたハプスブルグ家が信奉するカトリックを領民も信仰しなければならず、プロテスタント信者は迫害を受けていた。1651年から52年にかけて例外的にプロテスタント信者も教会堂を建造することが許されたが、立地・材質・工期に関して厳しい制限を受けた。こうした背景の下に平和教会はなるべく目立たないように建てられ、信仰の自由が統治体制からの黙認という形でしか得られなかった少数派にとって避難先となった。

宗教的な迫害と政治的な制限の中で信仰を守ったことは、長崎と天草地方の事例

と類似する。しかし、長崎と天草地方の潜伏キリシタンは信仰の自由を統治体制から黙認という形でも得ることはかなわなかったものであり、教会堂や宣教師との接触がまったく無い状況下で2世紀以上にもわたり信仰を継続した点で、長崎と天草地方の事例は平和教会と大きく異なる。

ハイファと西ガリラヤのバハイ教聖所群（イスラエル）

バハイ教は19世紀イランの預言者バーブとその信奉者バハーウッラーに始まる。イスラム教の若者の間で急速に広まったが、ガージャール朝により厳しく弾圧された。バーブは1850年に処刑され、バハーウッラーは国外に追放された。西ガリラヤは、バハーウッラーが1868年に訪れ、亡くなるまでの24年間を過ごした場所であり、バハイ教にとっての精神的な中心地として今日では数百万人を数える世界中の信仰組織の中心地へと発展した。

「バハイ教聖所群」は、国家による厳しい弾圧を受けた歴史を有する点に長崎と天草地方のキリスト教徒との類似点がある。しかし、バハイ教がバハーウッラーにゆかりのあるハイファや西ガリラヤにおいて指導者を中心として、主要な世界宗教の一つとなるまでに発展したのに対し、長崎と

天草地方の潜伏キリシタンは宣教師との接触を完全に絶たれた中で 2 世紀以上にもわたり宗教的には少数派として信仰を継続してきたのであり、本質的に異なる。

マサダ要塞（イスラエル）

紀元前 1 世紀にユダヤ王国のヘロデ王が築いた離宮兼要塞の跡である。紀元 66 年にユダヤ人がローマ帝国の支配に対して反乱を起こすと、ゼロテ派の一団がこの要塞を占拠した。70 年に首都エルサレムが陥落し神殿が破壊された後、残存する反乱軍はこの要塞に集結した。ローマ帝国の大軍に攻めたてられた約 1,000 人のユダヤ人は、ローマへの隷属よりも集団自決することを選んだ。陥落以降、この要塞はローマ帝国の管理下に戻り、ユダヤ人たちはディアスポラと呼ばれる困難な状況におかれた。

このようにマサダ要塞は、ユダヤ人への弾圧とその後の離散を物語る資産であり、原城跡における「島原・天草一揆」の際に徹底的な鎮圧を受け、その後は各地で潜伏を強いられた長崎と天草地方のキリスト教徒と類似点がある。しかし、マサダ要塞が反乱の鎮圧までの歴史に関連する場所である一方、長崎と天草地方の資産は「島原・天草一揆」以降の 2 世紀以上にもわた

る信仰の継続をも物語る資産が含まれる点で大きく異なる。

アウシュヴィッツ・ビルケナウ - ナチス・ドイツの強制絶滅収容所（ポーランド）

ナチス・ドイツが、民族差別主義や反ユダヤ主義の考えのもと、多数のユダヤ人や劣っていると見なす人々を虐殺した施設である。人間の尊厳に反する残虐で組織的な企み、及びそれに抗した人間の精神の強さを物語るものとして世界遺産一覧表に記載されている。

精神的な強さが資産で表されているという点では長崎と天草地方の事例とも類似する。しかし、長崎と天草地方の資産の場合においては、外来の宗教であるキリスト教の排斥が目指されていた一方で、ナチス・ドイツはユダヤ人をはじめとする民族の抹殺及び根絶という極端なイデオロギーに基づいていた点で全く異なる。

表 3-002 比較対象として抽出した世界遺産の事例

番号	資産名	評価基準	所在国	弾圧を受けた宗教的人物・コミュニティ	宗教的弾圧の期間	宗教的指導者と信徒の接触	宗教的弾圧の激しさ	迫害を受けた宗教的コミュニティの潜伏
1	ローマの歴史地区	(i) (ii) (iii) (iv) (vi)	イタリア及びバチカン市国	キリスト教徒	1 世紀から 313 年まで	保持	断続的	なし
2	バチカン市国	(i) (ii) (iv) (vi)	バチカン市国	キリスト教徒	1 世紀から 313 年まで	保持	断続的	なし
3	ペーチの初期キリスト教墓所	(iii) (iv)	ハンガリー	キリスト教徒	4 世紀から 8 世紀	保持	特定の宗教の弾圧ではなく異民族との対立	なし
4	カディーシャ溪谷と神の杉	(iii) (iv)	レバノン	マロン派	7 世紀末以降	保持	弾圧のためシリアから	洞窟内に物理的に潜伏
5	ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩石群	(i) (iii) (v) (vii)	トルコ	キリスト教徒	7 世紀以降	保持	特定の宗教の弾圧ではなく異民族との対立	洞窟内に物理的に潜伏
6	ヴァルトブルク城	(iii) (vi)	ドイツ	マルティン・ルター	1521 年から 1 年余り	バチカンから破門された	法的保護の外に置かれた	城が亡命先となった
7	ヤヴォルとシフィドニツアの平和教会	(iii) (iv) (vi)	ポーランド	プロテスタント	1648 年以降	保持	消極的な黙認	なし

番号	資産名	評価基準	所在国	弾圧を受けた宗教的人物・コミュニティ	宗教的弾圧の期間	宗教的指導者と信徒の接触	宗教的弾圧の激しさ	迫害を受けた宗教的コミュニティの潜伏
8	ハイファと西ガリラヤのバハイ教聖所群	(iii) (vi)	イスラエル	バハイ教徒	19 世紀半ば以降	指導者は 1908 年まで投獄	弾圧のためイランから逃避	なし
9	マサダ要塞	(iii) (iv) (vi)	イスラエル	ユダヤ人	第 1 次ユダヤ戦争(66~73 年)	反乱軍はマサダに籠城	特定の宗教の弾圧ではなく反乱の鎮圧	なし
10	アウシュヴィッツ・ビルケナウ - ナチス・ドイツの強制絶滅収容所	(vi)	ポーランド	ユダヤ人など	1942 年から 1944 年	収容者は厳しく監視されていた	約 3 年にわたる虐殺	なし
	長崎	(iii)	日本	キリスト教徒	16 世紀末から 1873 年	2 世紀以上にわたり断絶	2 世紀以上にわたる徹底した禁教	キリスト教徒でないふりをして社会的に潜伏

A-2 アジア地域におけるキリスト教関連の世界遺産

地域的な観点からキリスト教の要素が見られるものとしては「ゴアの聖堂と修道院」(インド)、「ゴールの旧市街とその要塞」(スリランカ)、「マカオの歴史地区」(中国)、「メラカとジョージ・タウン：マラッカ海峡の歴史都市」(マレーシア)、「フィリピンのバロック様式の聖堂群」(フィリピン)がある。

しかし、いずれもヨーロッパのキリスト教国の植民地支配下で建てられたものであり、キリスト教への弾圧は見られない。植民地支配はないものの、厳しい禁教政策が行われた長崎と天草地方の事例とは歴史的背景が明らかに異なる。

A-3 アジア諸国の暫定一覧表におけるキリスト教関連の資産

東アジアから南アジアにかけての地域の国々の暫定リスト(2016年1月時点)を検証したところ、「泉州の歴史遺産」(中国)及び「フィリピンのバロック様式の聖堂群(拡張)」(フィリピン)がキリスト教との関連を持つことが判明した。「泉州の歴史遺産」は基準(vi)でネストリウス派の中国南東部への伝播に言及しているが、中心的なテーマは海上交易ネットワークとなって

おり、キリスト教との関連性は限定的であると理解される。「フィリピンのバロック様式の聖堂群(拡張)」は既に世界遺産一覧表に記載されている教会堂と同様にスペイン統治下に建てられたものであり、宗教弾圧をテーマとしているわけではない。

なお、以下の国々の暫定一覧表にはキリスト教関連の資産が含まれていない(本推薦資産を除く)。

日本・韓国・北朝鮮・モンゴル・ベトナム・ラオス・カンボジア・タイ・マレーシア・ブルネイ・シンガポール・インドネシア・ミャンマー・バングラデシュ・ブータン・ネパール・パキスタン・インド・スリランカ。

比較項目 A の小結

比較した資産の成立背景は、全て長崎と天草地方の場合とは異なる。その中で、「カディーシャ溪谷と神の杉の森」(レバノン)及び「ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩石群」(トルコ)は、外圧に対して隠れて信仰を継続した点などに長崎と天草地方の資産との類似性が認められる。しかし、長崎と天草地方の場合は物理的ではなく社会的に潜伏していた点で本質的に異なる。従って、世界遺産一覧表及び比較対象とした国々の暫定一覧表の中には、長崎と

天草地方と類似する資産は存在しない。

B. アジア諸国のキリスト教受容の歴史に関する比較

次に、推薦資産が所在するアジアにおいてキリスト教がどのように伝播し、どのような反応を経て受容されたのかについて比較研究を行う。具体的には、東アジアの日本・中国・朝鮮（李氏）、東南アジアのベトナム・マレーシアにおいて、

- キリスト教の宣教がいつ開始したのか
- どのような弾圧及び潜伏の状況であったのか

という 2 つの比較項目を設定して分析を行う。なお、現在のアジアにおいては、フィリピンが最もキリスト教の盛んな国であるが、これは過去にスペインの植民地となった結果であり、受容の過程そのものが他のアジアの国々とは大きく異なる。

中国

8 世紀以来、中国には断続的にキリスト教が伝えられたが、本格的な宣教は、日本よりやや遅れて 1580 年代以降、マテオ・リッチらイエズス会宣教師が行った。イエズス会は北京（中央政府）との繋がりを重

視し、天文台長や暦作成の要務を担い、儒教の典礼を容認したが、これに対して主に地方部での宣教を行った他のキリスト教の修道会はイエズス会の方針を批判した。この対立は、教皇クレメンス 11 世による中国式儀礼の否定と清朝皇帝によるキリスト教の禁教という「典礼問題」にまで発展した。この後、中国では 18 世紀前半から 19 世紀半ばまでの約 1 世紀にわたりキリスト教の禁教が行われたが、広大な国土の中国ではキリスト教に対する取締が徹底されず、1810 年代までは刑罰も緩やかであった。また、禁教期であっても北京には宣教師が常駐しており、彼らが密かに中国人司祭等を地方に派遣しつつ教会組織を維持した。

これに対し、日本では 17 世紀から 2 世紀半にわたる厳しい禁教により、宣教師は国外に追放され、指導する宣教師も不在となったが、長崎と天草地方においては、潜伏キリシタンたちが独自に信仰組織を維持して信仰を継続した点で異なる。

朝鮮（李氏）

朝鮮には 16 世紀の日本や 17 世紀の中国からキリスト教に関する情報や書籍が伝来したが、宣教師による宣教活動が行われることはなかった。1784 年、中国で洗礼

を受けた李承薫が朝鮮初の礼拝所を設立した。つまり、朝鮮におけるキリスト教の普及は、中国を通じて西洋の学問に触れた朝鮮人知識層（両班階級）が自発的に行ったものであり、日本や中国のように宣教師による直接宣教を契機とするものではなかった。朝鮮におけるキリスト教への弾圧は、1801年に始まった。禁教が解かれる19世紀末までに四度の大きな弾圧が行われ、約1万人の殉教者を出すなど、弾圧の苛烈さという点では日本との共通点がある。

しかし、朝鮮では禁教の期間が日本よりも短く、またその期間においてもパリ外国宣教会の宣教師や朝鮮人の宣教師による宣教が行なわれていた。この点で、2世紀以上にわたる宣教師不在の中で信徒自らが信仰を継続し、独自の文化的伝統を形成した長崎と天草地方の資産とは異なる。

ベトナム

ベトナムにおけるキリスト教の本格的な宣教は、16世紀の後半にフィリピンから来たフランシスコ会士によって行われた。イエズス会も、禁教及び海禁によって宣教が困難となった日本に代わる宣教地として、1615年にコーチシナに、1626年にトンキンに、それぞれマカオから日本人

又はヨーロッパ人の宣教師を派遣した。その後、17世紀後半にはパリ外国宣教会も宣教を開始した。キリスト教の宣教活動は、ベトナムの社会に大きな変化をもたらした。例えば、宣教師によって考案されたベトナム語のアルファベット表記法「クオックグー」は、現在、正式な国語表記法として採用されている。また、阮朝によるキリスト教の弾圧はフランスの軍事介入を招き、その結果、19世紀後半にベトナムはフランスの植民地となった。ベトナム及び日本には、宣教が行なわれた歴史的文脈に密接な関連があるが、大きく異なる点もある。どちらの国でもキリスト教への弾圧があったものの、ベトナムの場合は宣教師の不在期間は30年と短い。また19世紀のフランスによる植民地化が、その後の教会堂建造に与えた影響も大きい。一方、日本の潜伏キリシタンは自分たちだけで2世紀以上にわたり信仰を継続し、解禁後に彼らがそれぞれの集落に教会堂を建てており、その独自の在り方が推薦資産で示されている。

マレーシア

7世紀にはアラビア半島からキリスト教徒の商人が来ていたとされるが、本格的な宣教活動は1511年にマラッカを征服した

ポルトガルの下で行われた。ポルトガルにより教会堂が建てられ、フランシスコ・ザビエルも 1545 年にマラッカを訪れて宣教活動を行った。その後もポルトガルによる宣教が行われたが、マラッカ征服から 100 年が経った 17 世紀初めでもキリスト教への改宗者は 8 千人を超えなかったとされる。1641 年にポルトガルを下してマラッカを支配したオランダは、宗教よりも貿易に関心をもっていた。しかし、オランダの支配下でもキリスト教は広まり続け、カトリック及びプロテスタントの教会堂が建てられた。18 世紀末にオランダ本国がフランスに敗れ、オランダ王家がイギリスに保護を求めたため、オランダの海外領土もイギリスが支配した。イギリスは徐々にマレー半島での支配を広げ、その動きに合わせてヨーロッパからの宣教師によってキリスト教がさらに広められた。

ヨーロッパ諸国による支配下でキリスト教が広められた一方で、様々な民族が集住し、それぞれの伝統を継続することが許された。こうした歴史背景の下に、マレー人の文化とヨーロッパ・中国・インドの文化とが交流し、特徴のある多文化的な町並みが形成された。

キリスト教とアジアの他宗教が共存する状況は、長崎と天草地方の場合と類似す

る。一方で、マレーシアの場合にはヨーロッパ諸国による支配及びその保護によりキリスト教が広められており、キリスト教徒がヨーロッパの宣教師との接触が無い中で信仰を継続した長崎と天草地方の場合とは大きく異なる。

比較項目 B の小結

ここでは、キリスト教の伝播及びそれが社会に与えた影響について、アジア諸国との比較研究を行った。ヨーロッパ諸国の支配下でキリスト教が広められたフィリピン及びマレーシアを除けば、いずれの国においても禁教政策がとられており、アジア諸国のキリスト教に対する一般的な反応であったことがわかる。しかし、禁教の程度及びその期間は地域によって不規則であり、2 世紀を超える日本の事例が最も長く厳しく、宣教師不在の中で何世代にもわたって密かに信仰を継続したのは日本のみである。

C 17 世紀後半から 19 世紀前半の日本国内の潜伏キリシタン関連遺産との比較

1867～73年： 浦上四番崩れ（ 〃 ）

1868年： 五島崩れ（現・長崎県五島市）

ここでは、日本国内のキリスト教関連遺産の中から、なぜ長崎と天草地方に所在する本推薦資産で代表されるのかを明らかにするため、国内の類似遺産との比較研究を行う。

禁教期、江戸幕府主導でキリスト教に対する徹底的な弾圧が行われ、日本各地におけるキリシタン組織の崩壊の様子は、「崩れ」と呼ばれる大規模な摘発事件の推移からうかがうことができる。記録が残る「崩れ」としては、以下の事例が知られる。

1657年： 郡崩れ（現・長崎県大村市）

1650～80年代： 豊後崩れ（現・大分県）

1660年： 濃尾崩れ（現・岐阜県、愛知県）

1790年： 浦上一番崩れ（現・長崎県長崎市浦上）

1805年： 天草崩れ（現・熊本県天草市崎津）

1842年： 浦上二番崩れ（現・長崎県長崎市浦上）

1856年： 浦上三番崩れ（ 〃 ）

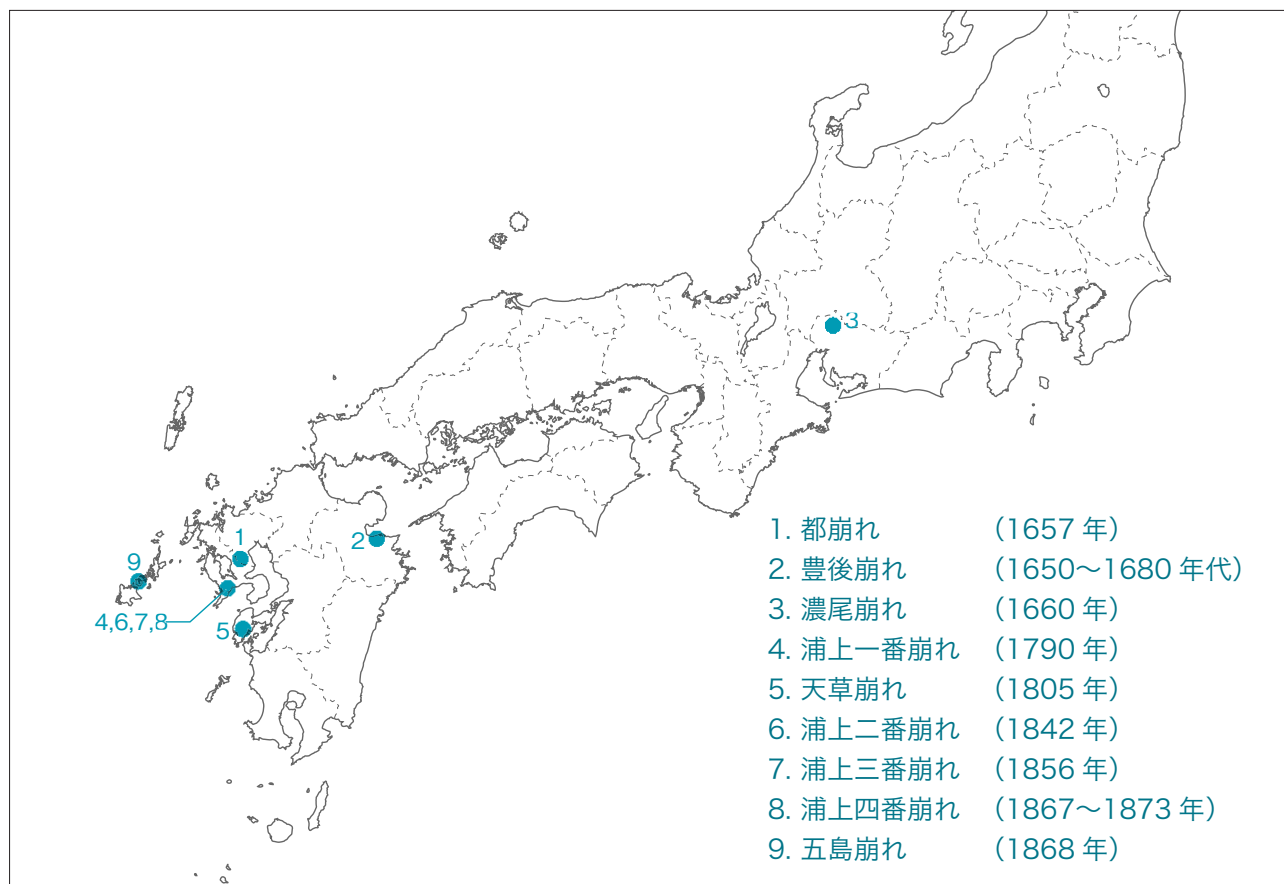
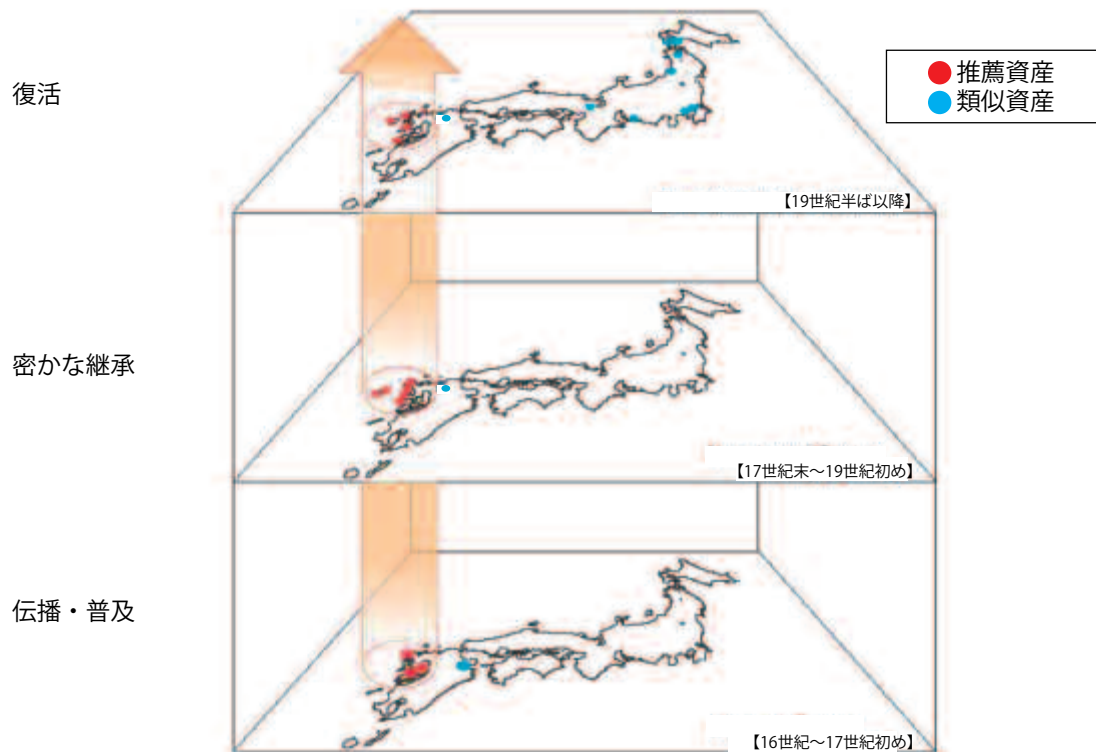


図 3 - 001 「崩れ」の発生した場所

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産及び類似資産の分布



長崎と天草地方は、16世紀の伝来から途絶えることなく組織的にキリスト教が継承されてきたことを示す物証がのこる日本で唯一の地域である。

図 3 - 002 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の分布

比較項目 C の小結

禁教令が出されてから半世紀を経た 17 世紀後半においても、長崎県の大村地域、大分県・岐阜県・愛知県において「崩れ」と呼ぶ潜伏キリシタンの摘発事件が発生していることから、国内の広い範囲で密かに組織的にキリシタンの信仰が継続していたことがわかる。しかし、18 世紀になると全国での「崩れ」はいったん終息し、18 世紀末から 19 世紀にかけての「崩れ」は長崎と天草地方に限定される。このことから、17 世紀末から 18 世紀にかけて全国各地の潜伏キリシタンの信仰組織は崩壊し、その分布は長崎と天草地方に限られていたことがうかがえる。禁教期の集落などの分布も、長崎と天草地方に限定されている。従って、比較研究の対象となる集落は長崎と天草地方以外には存在しない。

D. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン集落との比較

比較対象の抽出

16 世紀半ばに日本に伝わったキリスト教は 17 世紀初頭に全盛期を迎え、全国には約 37 万人のキリスト教信徒が存在した。しかし、その後の江戸幕府による禁教

によってキリシタンは激減し、18 世紀には長崎と天草地方とその周辺に分布するのみとなった。その数は、幕末に来日したパリ外国宣教会の神父の報告により約 2～3 万人と推定されている。潜伏キリシタンが居住していた場所については、田北耕也氏による 1950 年頃までの調査成果(1954)から、以下の場所が挙げられている。

- I 長崎郊外の浦上
- II 西彼杵半島外海の出津・大野周辺の集落
- III 18 世紀に浦上及び外海付近から移住がなされた黒島及び野崎島を含む五島列島の島嶼群
- IV 平戸島西岸及び生月島
- V 天草の大江・崎津など
- VI 福岡県太刀洗今村¹

上記の I～VI に対応する集落として、浦上及び長崎近郊で 15、外海で 19、五島列島及び黒島で 146、平戸及び生月島で 30、天草地域で 4 から成る合計 214 の集落に整理することができる（附属資料 3b）。

1

禁教期から移行期にかけての潜伏キリシタン集落について、長崎と天草地方以外では、福岡県今村集落のほか、佐賀県馬渡島、鹿児島県甑島、大阪府千提寺集落が知られる。しかしながら前節で述べたように、17 世紀～19 世紀を通じて組織的に信仰を継続し独特の文化的伝統を形成・継承した潜伏キリシタン集落は、長崎と天草地方に限定される。

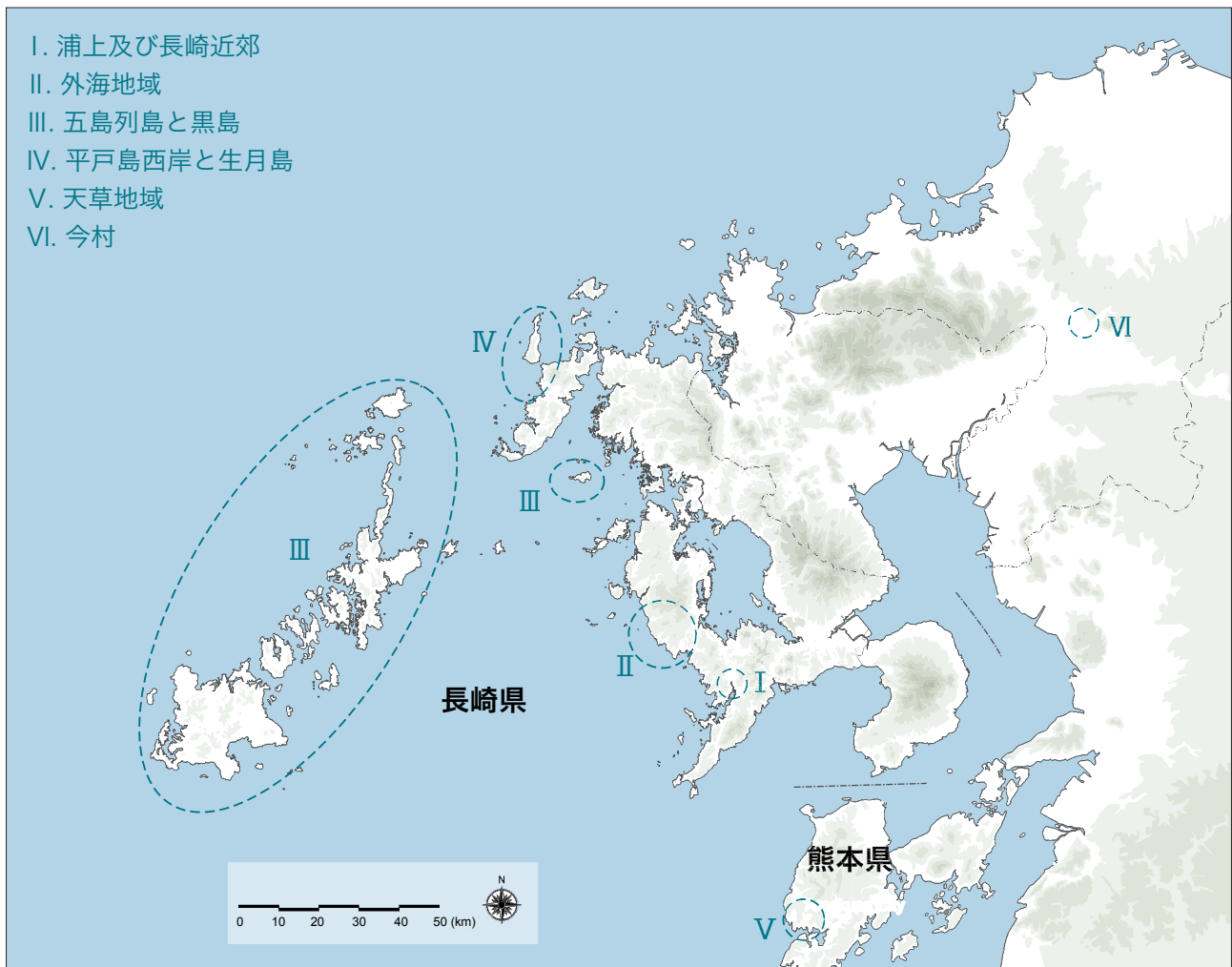


図 3-003 潜伏キリシタン集落が分布した地域

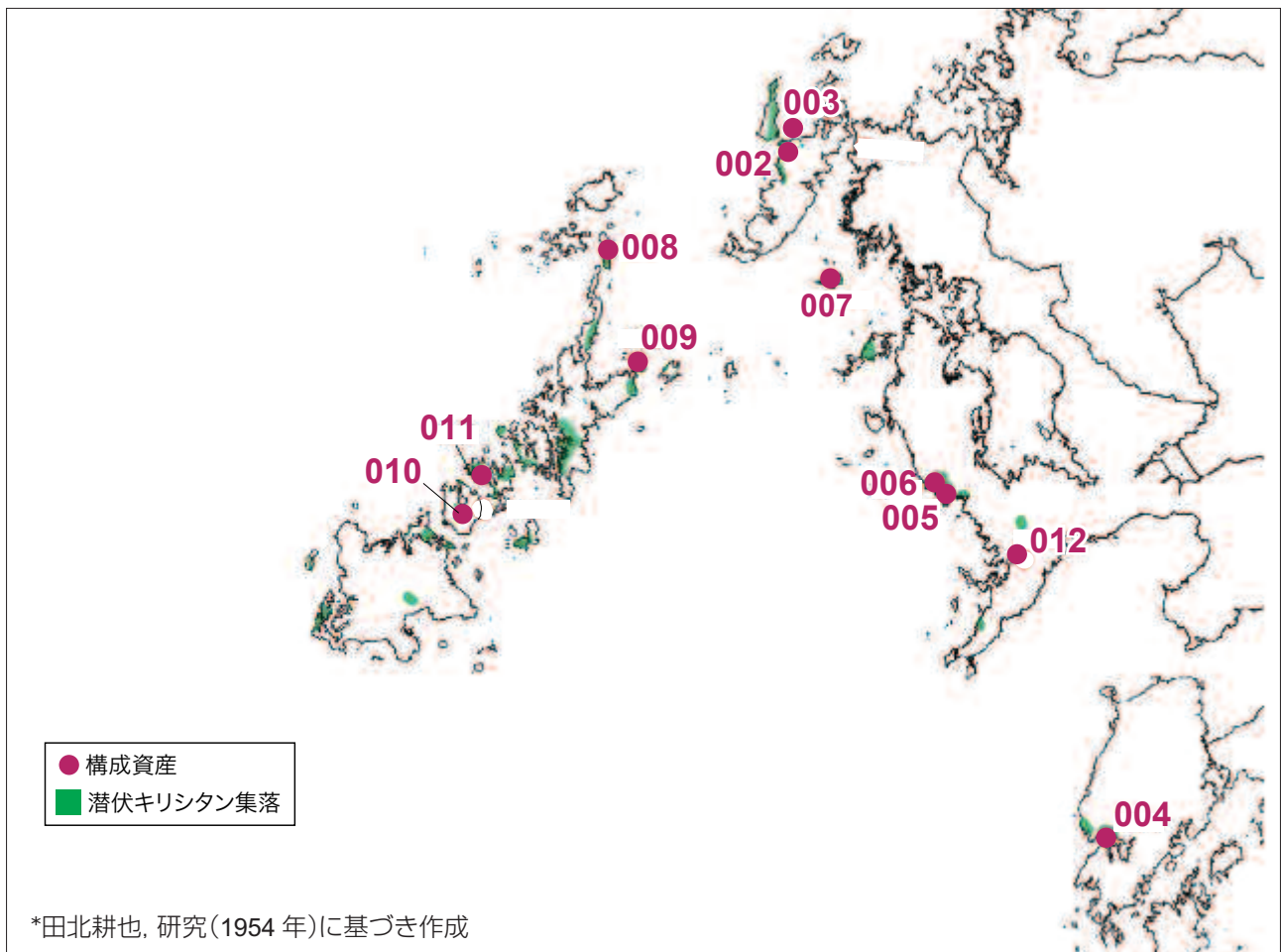


図 3-004 潜伏キリシタン集落の分布と構成資産

比較項目の設定

これらの集落の比較は、以下の 4 つの項目に基づき行った。

比較項目 1

評価基準 (iii) に照らして、顕著な普遍的価値への貢献という観点から以下の属性について比較した。

- 当該集落がキリスト教伝来の頃に遡る潜伏キリシタン集落(非移住集落)なのか、それともこうした集落から移住することによって形成された潜伏キリシタン集落(移住集落)なのか。
- 非移住集落の場合には、どのような潜伏手法を採ったのか。具体的には、何を信仰の崇敬対象としたのか。
- 移住集落の場合には、意図的にどのような場所を選んで入植したのか。

比較項目 2

真実性の節で述べたように、①形状・意匠、②用途・機能、③伝統・技能・管理体制、④位置・環境及び⑤精神・感性の観点から、当該集落が真実性を充足するか否かを検証した。

比較項目 3

禁教期・移行期の遺物を含む集落要素・集落構造の保存状況が良好か否かを検証した。

比較項目 4

その上で、国内法での保護措置が機能しているか否かを検証した。

214 の潜伏キリシタン集落のうち、43 集落が非移住集落、171 集落が移住集落であった。西彼杵半島など九州本土側に位置する集落は概ね非移住集落で、移住集落は五島列島及び小値賀諸島など島嶼部に集中する。なお、その中には長崎近郊でも伊王島に所在する大明寺集落があるほか、平戸島でも宝亀集落などの移住集落も見られる。

非移住集落の比較（詳細は附属資料 3b を参照）

潜伏キリシタン集落では、第 2 章 b でも述べたとおり、ア)全ての民衆が江戸幕府による寺請制度に基づき寺院に所属すること、イ)一見仏教徒と同じような墓石であるが埋葬時に身体の向きを変えるなど独特の葬送風習を持つこと、ウ)水方や帳方といった信仰の指導者のもと小規模な信仰組織を形成し信仰を継続することなどの集落間に共通する特徴が見られる。他方で、どのような潜伏戦略を採ったのか、具体的には何を信仰の崇敬対象としたのかについて各集落を詳細に検討することにより、

集落ごとにどのように潜伏していったのかが明確に把握できる。特に移住集落では、どのような場所を選択して入植したかということの詳細に検討することにより、集落ごとの移住の意図が明らかとなる。

43の非移住集落は、①山などの自然の聖地や殉教地などの聖地を崇敬する集落、②神社という既存信仰の崇敬地に自らの信仰を重ね、自らの信仰の場を在来集落のそれらと共有する集落、③キリスト教由来の信心具を崇敬する集落及び④秘匿したキリスト教由来の信心具が発覚する危険性を避け、代用品を崇敬する集落の4つの系統に分類することができる。

①及び②は土地を崇敬対象とした集落、③及び④は信心具を崇敬対象とした集落である。また、③は潜伏キリシタンであることが直ちに発覚するものであるが、それ以外は神道・仏教の集落においても通常見られるものを崇敬対象とした集落である。

以上の4つの系統に基づく非移住集落の比較の結果については、以下に示すとおりである。

①聖地崇拝によって信仰を秘匿した集落は、16集落確認された。このような集落の中で比較項目2～4を満たす集落は、

平戸市に所在する春日集落（附属資料3b、No.185）のみであった。根獅子集落（同188）、下中野集落（同183）など春日集落と同じ平戸島西海岸に所在する集落の中には、春日集落と同様に安満岳という聖地を密かに崇拝することにより潜伏を継続した集落もある。しかし、禁教期から現在までの集落構造が明確に判明しており、納戸神などの信仰対象が良好に遺存するなど、特に真実性の観点から春日集落が最も代表していると判断された。また、壱部在（同203）、元触（同206）など生月島に所在する集落も、中江ノ島でお水取りを行うなど春日集落と同様の聖地崇拝を行ってきた集落である。しかし、禁教期の集落構造等が明らかでない等の真実性の観点及び集落の土地利用形態を将来にわたり継承していく保存体制等が確実でないなどの観点から、春日集落に及ぶものではないと判断された。

②神社という既存の信仰施設に崇敬地を重ねることにより信仰を秘匿した集落は、7集落確認された。これらのうち比較項目2～4を満たす集落は、集落の氏神であるところの大野神社の氏子となり、より生活に身近な門神社・辻神社で密かにキリスト教に由来する祭神を立て

て祈りを捧げた大野集落（附属資料 3b、No.24）のみであった。

- ③聖画像又はコンタツなどキリスト教由来の信心具を崇敬した集落は、23 集落確認された。これらのうち比較項目 2～4 を満たす集落は、マリアの聖画像、日本語の教義書・教会暦など数多くの信心具が、各々の信仰組織において継承されてきた上出津・中出津・下出津（附属資料 3b、No.26～28）の 3 集落のみであった。天草市に所在する今富集落（同 213）ではウマンテラサマと呼ばれる天使像が集落の山中から出土したが、禁教期に崇拝の対象とされた像であることは想定できるものの、具体的にどのように崇拝され、信仰の秘匿・維持のためにどのように継承されてきたのかが明らかではなく、真実性の観点から出津の各集落に及ぶものではないと判断された。

- ④発覚に対するリスク回避の観点から、キリスト教由来の信心具ではなく、日常生活の中で身近にある品を信心具として代用することにより信仰を秘匿した集落は、23 集落確認された。これらのうち比較項目 2～4 を満たす集落は、漁業神をゼウスと見立てて信仰し、アワビやタイラギなどの海産物に聖母マリアの模様を見い出して信心具とするなど、生業

の在り方と強く連関した手法で信仰を秘匿した崎津集落（附属資料 3b、No. 212）のみであった。集落の中には、浦上の家野集落・本原集落・中野集落・里集落（同 1～4）、外海の上黒崎集落（同 29）など、仏教の観音像を聖母マリアに見立てたマリア観音と呼ばれる信心具を用いていた集落が存在するが、いずれも禁教期の信心具としてマリア観音像が伝わっているのみであり、それが信仰組織の中でどのように機能していた等が明らかではなく、真実性の観点から崎津集落に及ぶものではないと判断された。

なお、長崎市西檜山集落（附属資料 3b、No.17）及び天草市高浜集落（同 214）のように、禁教期に潜伏キリシタン集落であったことは判明しているものの、文献等の史料の限界により、当時の信仰組織の在り方及び集落構造等が全く分からない集落が 11 集落確認された。

移住集落の比較（詳細は附属資料 3b を参照）

171 の移住集落において潜伏戦略の観点から最も特徴が表れるのは、移住に際してどのような選地を行ったかである。移住した際に既に成立していた集落は神道・

仏教の集落であることから、その中に入植すれば信仰が発覚する恐れが高い。そのため、既存集落を巧みに避けて入植を行った。171 の集落は、①神道・仏教の聖地であったため既存集落が成立していなかった土地、②病人の療養地として利用されていたため既存集落が成立していなかった土地、③急峻な地形又はやせた土地・厳しい気候などの理由で集落が成立していなかった土地及び④平戸藩の牧など何らかの土地利用が行われていた場所が後に放棄され、再開発の観点から移住の対象とされた土地の 4 つの類型に分類できた。特に①及び②は敬遠地、③及び④は空閑地と分類することもできる。

以上の 4 つの類型に基づく移住集落の比較については、以下に示すとおりである。

①神道・仏教の聖地であったため、既存集落が成立していなかった土地への移住により成立した集落は、野崎島の野首集落及び舟森集落（附属資料 3b、No.35・36）のみであった。野首集落及び舟森集落は、禁教期及び移行期に遡る集落構造が明らかであり、かつ良好に遺存していること、文化財保護法に基づく保護措置が機能していることから、比較項目 2～

4 も満たしている。

②病人の療養地であった土地への入植により成立した集落は、上五島中通島の赤波江集落（附属資料 3b、No.43）、頭ヶ島の集落（同 57）、奈留島の前島集落（同 114）及び下五島福江島の南河原集落（同 151）の 4 集落が確認された。これらのうち比較項目 2～4 を満たすのは、仏教徒であった入植指導者の下で移住し、後にキリスト教信仰の指導者を招聘してカトリックに復帰した頭ヶ島集落のみであった。赤波江集落・前島集落・南河原集落は、禁教期にどのような経緯で入植したのか、また移行期にどのような経緯でカトリックに復帰したのかという歴史的経緯が必ずしも明らかではなく、特に真実性の観点から頭ヶ島の集落には及ばないものと判断された。

③地勢的理由から未開発であった土地に移住した集落は、潜伏キリシタンの入植戦略で圧倒的多数を占めており、142 集落を数える。そもそも大村藩と五島藩との間の協定及び平戸藩の政策等で開拓民として移住政策が推進されたことから、移住した潜伏キリシタンの入植地は一義的には未開拓地であったと考えられる。これらのうち、比較項目 2～4 を満たすのは、斜面地開拓のための石積み技

術を継承していた外海地域から移住した潜伏キリシタンが、強風で水に恵まれない急斜面地であるなど、一見すると耕作不適地であった久賀島に入植して形成した幸泊・五輪・外輪・折紙・大開・永里・竹山・細石流・内上平・外上平・小島・浜泊の各集落（附属資料 3b、No.125～136）である。

- ④移住までに何らかの土地利用が存在し、それが廃絶されたために再開発を目的として移住が進んだ集落は、7 集落が確認された。これらのうち比較項目 2～4 を満たすのは、平戸藩によって経営されていた牧場が政策的に廃止され、そこに入植して畑地を開拓した佐世保市黒島の各集落（附属資料 3b、No.175～180）のみである。平戸市神崎集落（同 181）は、真実性、保存状況及び国内法の適用状況のいずれの点においても黒島の集落に及ぶものではなく、再開発地に移住して信仰を継続した代表的な集落の事例は黒島の各集落であると言ってよい。

比較項目 D の小結

禁教期に我が国に所在したとされる 214 の潜伏キリシタン集落を抽出し、①顕著な普遍的価値への貢献（比較項目 1）、②真実性の充足（比較項目 2）、③保存状況（比

較項目 3）及び④保護措置の担保（比較項目 4）の 4 つの観点から比較を行った。その結果、これらの観点を満たすのは、外海の出津集落（上出津・中出津・下出津）、外海の大野集落、黒島の集落（名切・蕨・日数・東堂平・田代・根谷）、野崎島の集落（野首・舟森）、頭ヶ島の集落、久賀島の集落（幸泊・五輪・外輪・折紙・大開・永里・竹山・細石流・内上平・外上平・小島・浜泊）、平戸の春日集落（安満岳・中江ノ島を含む）及び天草の崎津集落であることが明らかとなった。

E. 移行期に長崎と天草地方の潜伏キリシタンの各集落に建造されたカトリック教会堂に関する比較

比較対象の抽出

1865 年の「信徒発見」の報は、瞬く間に各地の潜伏キリシタン集落に伝わった。各集落では様々な葛藤のもと、カトリックに復帰することを選択した人々、禁教期以来の信仰を継続することを選択した人々、そのどちらでもなく神道・仏教に帰依する人々が出てきた。こうした中、禁教期に育まれた潜伏キリシタンの伝統は徐々に変容し、特にカトリックに復帰した集落で

は、集落内に新たに教会堂が建造されたことをもって、禁教期以来の信仰の継続に関する伝統が完全に変容したものと考えられる。従って、教会堂は潜伏キリシタンの伝統の移行期の終点を示し、さまざまな葛藤の末に伝統が終焉したことを象徴的に表すものである。

現在、長崎と天草地方には 137 のカトリック教会堂が存在する。これらのうち、禁教期に潜伏キリシタンの集落が成立していた場所に建造された教会堂は 73 棟である。(附属資料 3c を参照)。

比較項目の設定

教会堂を比較するにあたっては、以下の 4 項目から検証を行った。

比較項目 1

初代の教会堂がいつ建造されたのか。

比較項目 2

真実性の観点から、

- 現存する教会堂がいつ建造されたのか。
- 教会堂がどのような場所に立地するか。
- どのような工法を採ったのか。

比較項目 3

教会堂の敷地を含む建地区全体の保存状況が良好か。

比較項目 4

国内法での保護措置が機能しているか。

具体的な比較

73 棟の教会堂のうち、大浦天主堂を除けば最も早いもので「信徒発見」後 10 数年で建造に至っている。19 世紀末までには大浦天主堂を含め 36 棟の教会堂が建造されており、その地理的分布も長崎と天草地方の全域に及んでいることから、まさにこの地域において雨後の竹の子のごとく教会堂の建造ラッシュが約 30 年の間に生じていたことがわかる。

教会堂が建造された集落は、比較的移行期が長期にわたり継続した集落である。それらは、経済的理由により長期間教会堂の建造に至らなかったのか、移行期に伴う信仰上の葛藤が複雑であったのかの違いは別として、ともかく教会堂を長期間持たなかった集落において、カトリックへと復帰したことを象徴的に表す施設であった。なお、集落の中には初代の教会堂の建造が第 2 次世界大戦後にまで下がる集落も存在する。これらの集落では、第二次世界大戦後

まで約80年間もの長期間にわたって移行期が続いたと理解するよりも、むしろ集落におけるカトリック信徒数の増加（多くは自然増に伴うもの）が新たな教会堂を建造する契機となったものと判断できる。

教会堂の多くは、集落内のあらゆる場所から望見できる集落の中心地をはじめ、海辺の高台、訪問することが容易な場所等に建造されている。集落の中心地に教会堂を建造するのは、カトリックにおいて通有の典型的な場所の選択による。また、禁教期に絵踏を強制された場所、迫害による殉教があった場所、禁教期の信仰指導者にまつわる場所など、禁教期の記憶と強く結びつく記念地に教会堂を建造した例も見られる。

他方で、強風・湿気を避けるなど、通常の民家を建造する場合と同じ考え方の下に場所を選択した集落もある。このような建造すべき敷地の選択に関わる集落の知恵は、禁教期からつながる各地域に固有のものである。

73棟の教会堂は、宣教師の指導により高度に西洋的な工法を採るもの、日本人大工により建造され民家と同様の伝統的な工法を採るもの、和洋折衷の工法を採るものなど、建設された時期に応じて様々な建築工法を採っている。建築材料に関して

は、大浦天主堂をはじめとして多くの教会堂がレンガ造又は木骨レンガ造である。カトリックに復帰した象徴として信徒たちが教会堂を求めた際、集落に展開する木造民家とは明らかに外観が異なるレンガによる建造の手法を望んだものと考えられる。また、比較的近年に建造された教会堂又は建て替えられた教会堂は、コンクリート造となっているものが多い。

特に注目されるのは、在来の建築技法と地域の建材を用いて教会堂を建造した事例である。例えば、頭ヶ島の集落の頭ヶ島天主堂は、近傍で産出する砂岩を用いて建造されている。意匠は、ロマネスク調を意識したものであり、周辺の建造物とは明らかに異なるが、周囲の建築物・工作物にも多用されている砂岩を用いているため、教会堂も集落の景観と良好に調和している。また、周囲の建築物と同じ地域で産する木材を用いて建造された木造教会堂は、同様の理由からその存在を主張しつつも調和良く集落景観に溶け込んでいる。

上記の4つの比較項目によって、移行期の終焉を示す教会堂の中でも、禁教期との文化的・社会的・技術的連続性を高く示すものは、比較的長い移行期を経て、風土に溶け込むように立地し、在来の建材を用いて建造された教会堂である。これらの条

件を満たす教会堂として、以下の3つが確認された。

善長谷教会堂（附属資料 3c、No.30）

1895年に谷間の傾斜地に建てられた木造平屋建ての教会堂。石積みを伴う平地を造成して建造されており、西からの海風を受ける教会堂正面には防風林を設えるなど、当地の風土的特徴をよく表す。しかし、初代教会堂の意匠・形態は不明であり、現存する教会堂は1952年に建て替えられたものである。そのため、保存状況は良好であるものの、文化財として国内法で評価し保存措置を講ずるには至っていない。

江上天主堂（同 37）

1917年に谷間の低地に建てられた木造教会堂。石積みを伴う平地を造成して建造されており、南西からの海風を受ける教会堂正面には防風林を設えている。湿気を防ぐために高床式になっており、軒裏には当該地域でよく見られる花を意匠した通気口が設けられるなど、当地の風土的特徴をよく表す。現存する教会堂は2代目のものであるが、初代教会堂の建造のわずか10年後に建てられたものであることから、初代の教会堂は仮聖堂のような施設であったことが想定される。保存状況も良好であ

り、文化財保護法の下に重要文化財として指定され、万全の保護措置が採られている。

貝津教会（同 54）

1924年に開放的な台地上に建てられた木造平屋建ての教会堂。周囲には防風林を設えており、当地の風土的特徴をよく表す。初代教会堂が現存するものの、正面の窓がアルミサッシに取り替えられているなど後年の改変が顕著であり、保存状況は必ずしも良好ではない。そのため、文化財として国内法で評価し保存措置を講ずるまでには至っていない。

比較項目 E の小結

禁教期に育まれた潜伏キリシタンの伝統が変容・終焉したことを象徴的に表すものとして73棟の教会堂を抽出し、①移行期の継続期間（比較項目1）、②真実性の充足（比較項目2）、③保存状況（比較項目3）及び④保護措置の担保（比較項目4）の4つの観点から比較を行った。その結果、これらの観点を全て満たしているのは、江上集落に所在する江上天主堂であることが明らかとなった。

結論

推薦資産と成立背景・性質が類似する国内外の文化遺産について、個別テーマを設定して比較を行った。その結果、以下の 5 点が明らかとなった。

A. 宗教弾圧と直接関連する世界遺産との比較では、推薦資産に類似する資産は存在しない。

B. アジア諸国のキリスト教受容の歴史の比較においても、2 世紀を越える日本の禁教の事例が最も長く厳しいものであり、宣教師不在の中で何世代にもわたって密かに信仰を継続したのは日本のみである。

C. 日本国内のキリスト教関連の類似遺産との比較では、国内の潜伏集落は 18 世紀にかけて崩壊し、その分布は長崎と天草地方に限られていった。

D. 長崎と天草地方の 214 の潜伏キリシタン集落における比較では、顕著な普遍的価値への貢献の程度及び保護措置の確実さの観点から、推薦資産に含めた集落が代表的な事例である。

E. かつての潜伏キリシタン集落に建造された 73 棟の教会堂における比較では、顕著な普遍的価値への貢献の程度、真実性及び保護措置の確実さの観点から、江上集落に所在する江上天主堂が

代表的な事例である。

以上のとおり、推薦資産と成立背景や性質が類似する国内外の文化遺産との比較を行った結果、推薦資産がそのいずれとも異なる独自の価値を持ち、適切な資産構成であることは明らかであり、世界遺産一覧表に記載することの合理性は明白である。

3.3 顕著な普遍的価値の言明

a. 総合的所見

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、17 世紀から 19 世紀の 2 世紀以上にわたるキリスト教禁教政策の下で密かに信仰を伝えた人々の歴史を物語る他に例を見ない証拠である。本資産は、日本の最西端に位置する離島を含む地において潜伏キリシタンがどのようにして既存の社会・宗教と関わりつつ信仰を継続していったのか、そして近代に入り禁教が解かれた後、彼らの宗教的伝統がどのように徐々に変容・終焉し、近代を迎えていったのかを示している。

本資産は、大航海時代にキリスト教が伝わったアジアの東端にあたる、日本列島の最西端に位置する長崎と天草地方に所在する 12 の構成資産から成る。16 世紀後半に海外との交流の窓口であった長崎と天草地方に定住した宣教師の指導を直接的かつ長期間にわたって受けた長崎と天草地方の民衆の間には、他の地域に比べて強固な信仰組織が形成された。このような状況のもとで、17 世紀の江戸幕府による禁教政策により日本国内から全ての宣教師が不在となった後も、長崎と天草地方では少なからぬカトリック教徒が、小規模な信仰組織を維持して信仰を自ら継続し、

「潜伏キリシタン」となって存続した。

潜伏キリシタンは、信仰組織の単位で小さな集落を形成して信仰を維持し、そうした集落は海岸沿い、又は禁教時代に移住先となった離島に形成された。2 世紀を越える世界的にも稀な長期にわたる禁教の中で、それぞれの集落では一見すると日本の在来宗教のように見える固有の信仰形態が育まれた。

本資産は、12 の異なる構成資産が総体となって、潜伏キリシタンの伝統についての深い理解を可能としている。本資産は、禁教政策下において形成された潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる独特の伝統の証拠であり、長期にわたる禁教政策の下で育まれたこの独特の文化的伝統の在り方を示す本資産は、顕著な普遍的価値を有する。

b. 評価基準への適合性証明

評価基準(iii)

本資産は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を継続する中で育んだ独特の宗教的伝統を物語る証拠である。

禁教期の潜伏キリシタンが自らの信仰を密かに継続する中で育んだ固有の信仰

形態、大浦天主堂における「信徒発見」を契機とする新たな信仰の局面及び固有の信仰形態の変容・終焉が、12の構成資産によって表されている。

c. 完全性の言明

本資産は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を継続する中で育んだ宗教に関する独特の伝統を物語る12の構成資産から成る。これらの12の構成資産は、資産の顕著な普遍的価値を表す全ての要素を含んでいる。その範囲は適切に設定され、いずれも保存状態は良好である。

構成資産は、文化財保護法など適切な国の法律及び規則で、万全の保護措置が講じられている。緩衝地帯は、文化財保護法の他、景観法その他の関係する法律及び規則で適切な保護が図られている。従って各構成資産は、開発又は管理放棄による負の影響は受けておらず、周辺環境とともに良好に保全されている。

d. 真実性の言明

個々の構成資産は、その性質により選択した属性に基づき、高い水準の真実性を維持している。各集落は、「形状・意匠」、「用途・機能」、「伝統・技能・管理体制」、「位

置・環境」及び「精神・感性」の各属性に基づく高い真実性を保持している。考古遺跡である原城跡は、上記のうち「用途・機能」の真実性は失っているが、それ以外の真実性は保持している。大浦天主堂及び奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）における江上天主堂は、上記の属性に加え建築としての「材料・材質」においても高い真実性を保持している。

e. 保護と管理に必要な措置

構成資産及び緩衝地帯は、文化財保護法をはじめとする諸法令により保全されている。また、関係地方公共団体は、資産全体が有する顕著な普遍的価値を一体的に保護する観点から「包括的保存管理計画」を策定し、その実行体制として、所有者その他の関係者とともに「世界遺産保存活用協議会」を設置した。この協議会は、資産の適切な保存・整備・活用のために活動する。この協議会は、文化遺産の保護に係る主務官庁である文化庁のほか、「長崎世界遺産学術委員会」の専門家による指導・助言を受ける。

‘blank page’